新しい 授業 づくりの文化を創る

第13号

令和5年 2月 「能力ベイスの授業づくり実践講座」 教材研究会

令和4年度の10月に実施した講座Ｅセット（小学校社会科）の教材研究会において、講師の齊藤先生から、社会科の授業における「問題解決学習の歩み」として、6つのフェーズを学んだ。今回の授業者は、その中の第5世代に挑戦するといった提案である。会場の受講者と一緒になって、これからの社会科の授業づくりについて考える時間となった。
＜参考＞第1世代「理解型」、第2世代「説明型」、第3世代「問題解決型」、第4世代「意思決定型」、第5世代「社会形成型」、第6世代「社会参画型」（講座新聞第10号参照）

授業者の提案

＜単元を貫く問い＞ 「あなたが鎌倉時代に生きたなら、どのような生き方ができたのだろうか？」

授業者 ： 宮本 直明 教諭　　学校 ： 吹田市立山田中学校
学 年 ： 第2学年　　教科 ： 社会科 （教材:『中世の日本』）

第5世代の授業 「社会形成型」の授業づくりに挑戦！

社会科の授業を通して、「様々なことやものに対して立ち向かえる力」を身につけて欲しい。その力は、身近な小さな社会（生徒会活動・委員会・学級活動・仲間関係等）に常に必要とされている。自分の考えをもって、その小さな社会に関わることが、これからの社会を担っていくことにつながることを、社会科の授業を通して実感させたい。

【WHY】なぜ『中世の日本』を学ぶのか

提案 民衆の姿を多角的な視点で捉える力を育成するため。

理由 中世から長い武家政権が始まるため、この単元は、歴史の転換期といえる。民衆の生活のみならず、政治の在り方、日本を治める立場や身分も変化していく。ゆえに、民衆の生き方を通して、多角的に考える力を育成すると考えた。

【WHAT】『中世の日本』で何を学ぶのか

提案 鎌倉時代の民衆の生き方や暮らし

理由 古代と中世の比較を通して、子供は、鎌倉時代の民衆の暮らしについて考えるようになる。具体的には、「律令国家と鎌倉幕府のしくみ」、「鎌倉仏教と民衆の生活の関連性」、「元寇と徳政令のつながり」等を、考える対象としていく。

【HOW】いかに『中世の日本』を学ぶのか

提案 単元を貫く問いと、毎時間の学びを関連付けて単元を描く。

理由 武家政権下での民衆の生活を自分事に置き換えて考えさせたいため。古代と中世を比較し、民衆はどのような思いで生活を送っていたのかを考える。単元では、知識、表現、探求、問いの深化等ポイントに分けて進めていく。

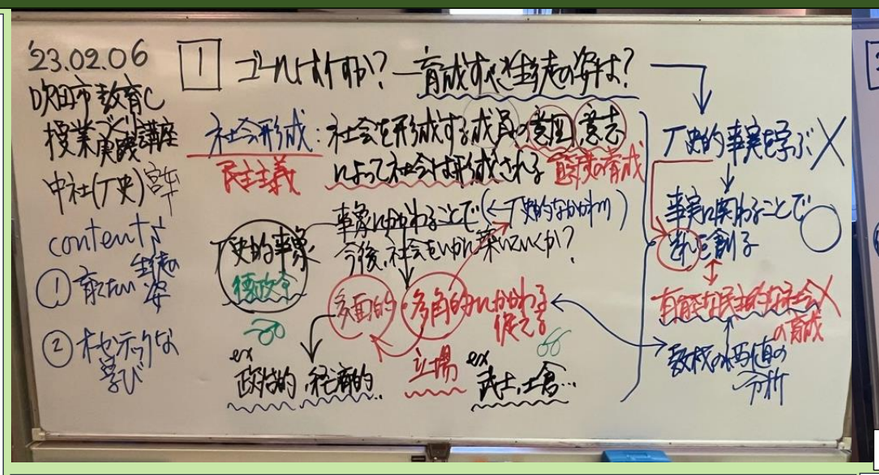
＜全体協議の論点＞「授業者の設定した単元を貫く問いは、学習指導要領の趣旨を実現することができるか」

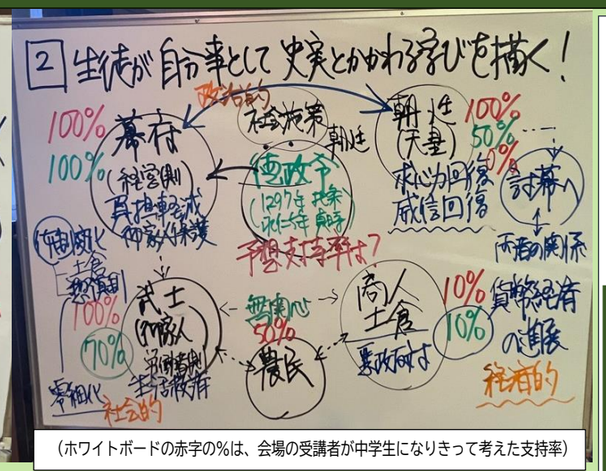
齊藤先生から

「社会形成型」の授業へのチャレンジはすばらしい。重要なことは、その授業を通して、どんな子供を育てたいかをはっきりさせること。

社会形成型の社会科の授業とは？

民主主義を前提とした社会を形成する態度を育成する授業。それが社会形成型の授業。そこで大事にしたいことは、「社会には様々な意見の人がいて、その人たちの意見（民意）が絡まりながら、世の中は動いてきたんだ」というように歴史を見ることが出来るようになること。つまり、そういう見方ができれば、同じような史実が出てきたときに、子供自らがその見方で眺められるようになる。そのためには、歴史的事実を知ったり覚えたりすることで終わるのではなく、1つの歴史的な事象（例えば徳政令）に、当時の人々がどう関わったかを見つめていくような営みが必要。つまり、**歴史的な事実に多面的・多角的に関わる**ことで、**歴史を創る**ことが大事ということ。それを通して、公民的資質（有能な民主的な社会人）を育てたい。





（ホワイトボードの赤字の%は、会場の受講者が中学生になりきって考えた支持率）

齊藤先生の授業提案

社会形成型の授業の実現に向けて、齊藤先生から授業の提案があった。単元の中で、徳政令に人々がどう関わったかを子供たちと整理する場面（ホワイトボード参照）の問いである。

問い
来週、徳政令が出そうです。テレビ局のグループは、電話アンケートで「来週徳政令が出ます。あなたはこれについて賛成ですか？反対ですか？」と世論調査しました。予想支持率を出してみたらどうなる？

多面的・多角的な授業づくりとは？

多角的:「立場」のこと。幕府や御家人、商人、朝廷等から見た時に、徳政令とはどんな風に写っていたのか等。
多面的:その立場の人から、眺めたときの「側面」のこと。例えば、武士が徳政令を考えるときの、「政治的」な側面、「経済的な側面」、「社会構造的な側面」等。

事象と関わるときに、多面的かつ多角的でないと判断できない。例えば、徳政令に関わった人は、いっぱいいて、その人たちの意図や意志によって、当時の社会は形成されていた。「多面的・多角的」の考え方は似ているが、意味は違う。授業者提案の「あなたが●●だったら」と考えることはよいが、きっかけがない限り、「だったら」とは考えにくい。そういうきっかけを考える必要がある。

上記の問いを子供たちに投げかけることにより、朝廷が100%と0%のグループのズレが起きて、議論が起こり始める。その議論は、多面的・多角的な議論となり、子供たちは、「教師が追究させたい史実の本質」を示そうと動き始める。議論の深まりの程度を見計らって、指導者から、教師の深い教材研究に支えられた当時の仮の支持率（ホワイトボード緑字の%）を伝えると、子供たちの議論はより焦点化されたものになる。このような子供の営みこそ、史実を「追究する」ということ。

これまではコンテンツベイスの授業づくりが中心であったため、教師が時系列的に押さえていくことが大事と思っていた。今日の会場の受講者のように、最終的には時系列に整理したくなるような追究のきっかけを、これからの社会科の授業ではつくっていきたい。

【受講者の声】
・ゴールを見出すことは難しかったですが、グループ協議で悩みながら話し合ったことは学びになりました。齊藤先生の授業のつくり方は、いつも感動させられます。（I 先生）
・「覚えるために覚える」から「問題解決をするために覚える」への転換。覚えると言っても、詰め込むのは厳しい。子供が進んで深いコンテンツ理解を行うには、知識獲得のプロセスを問い直す必要があるという言葉が響きました。（S 先生）
・支持率の授業、子供の姿を想像したら、とてもおもしろそうです！是非見てみたい。（K 先生）

【編集後記】
今回の教材研究会のセットとなる授業研究会は、令和5年度の1学期に実施予定です。年度を超えた授業づくりに、授業者は、今の子供たちの姿をしっかり捉え、次年度につなぐために、今年度中に育成すべき資質能力は何か？と問い続けていました。「年度末」と聞くと、私もついつい「ゴール」のような気になってしまいますが、次年度につなぐ「ベイス（始発点）」であるということを、授業者の姿から学びました。さて、自分自身も、次年度に向けて、より質の高いベイスをつくるために、 今の業務に向き合いたいと思います。　（文責：教育センター 小林）